早稲田大学大学院教育学研究科紀要　別冊　11号―1　二〇〇三年九月

国語科教育と連句教材

―古典教育の活性化を目指して―

南　陽子

一九八〇年代のコピーブームのさなか、〈連句〉は一時、一般の知名度をあげた。失速状態にある現在でも、インターネット連句などで仮想された「座」を楽しむ連衆は多い。連句を巻くという小さな共同制作は、現代人にとって―物珍しさも含め―何かしらの魅力を秘めているのだろう。

歌仙の一般的な形態である連句は、「発句」と呼ばれる5・7・5の俳句形式の句で始まる。これを短歌で言う上の句に見立て次の詠み手が下の句に当たる7・7の「脇句」をつけ、さらに次の詠み手が「脇句」を踏まえて5・7・5の「第三」を詠み、更に「第三」に四句目を7・7と繋げ、鎖状に順次続けることで「表」6句・「裏」12句を二組、計36句を詠むという、中世連歌の俳諧化（滑稽化・当世化）された詩形態である。近世初期、芭蕉によって完成されたと言われる連句は、主に俳句実作者の集まる場を中心として、現代まで受け継がれてきた。複数の詠み手によってひとつの作品を作り上げる特殊性から、前近代・日本社会の共同体的性格が如実に伺え、日本文化論としても今後考察の余地を多く残す文芸である。

ところで国語科教材のなかで、韻文ほど曖昧な位置にあるものはない。万葉歌に始まり和歌・俳句・川柳・狂歌・民謡・近代短歌・自由律詩―古代から現代に至るまで、韻文の歴史は広く深い。短歌・俳句・川柳の実作者は、プロ・アマ合わせて少なくない数に昇る。にもかかわらず、韻文の教科書採録は形式的にとどまり、実際の授業時には割愛されることもしばしばであるのが現状だろう。教え方が確立していないこと、何を教えるかが曖昧であること、客観的な評価がしにくいことなどが、その原因として指摘できる。韻文指導の際の、「目的」と「方法」を明確に示す必要があるのだ。本論は、先行する実践例の「目的」と「方法」を確認し、連句の鑑賞と実作が国語科教材としてどのような可能性を持つかを検討すると同時に、広く「古典」・「韻文」教材を扱うための新たな視点を模索しようとするものである。

一、先行研究

大修館書店・古典Ⅱ（平成十二年度用）「俳諧」の項は、芭蕉『猿蓑』（元禄三年一六九〇）から「市中の巻」を紹介している。本教科書では［学習の手引き］の項に次の二点を挙げている。

> 1　「市中の巻」について、前句と付句との二句ずつで、それぞれどのような情景が表現されているか、考えてみよう。
>
> 2　三人一組となり、次の条件を守って、秋の発句（五七五）、脇（七七）、第三（五七五）を作ってみよう。
>
> ①　各句に、秋の季語を入れる。
>
> ②「三句がらみ」にならないよう、「第三」を転じる。

1が鑑賞の、2が実作の手引きである。国語科教材に連句を用いる場合、2の実作をいかに指導するかが最も注目されるだろう。

実作面で早くから実践を重ねてきた報告に、宮脇真彦・高野光男の先例がある。また、貝田桃子『創作し伝え合う国語科授業』（学事出版、二〇〇〇年）では「連句あそび」をとりあげ、作文教育を柔軟に、多様に展開しようとする試みの一端がうかがえる。連句を教室で取り上げる意義を、宮脇は次のように考察している。

連句を共同で作成して行くプロセスは、「誰か他人の作った句」に「自分の句」を付ける試みであり、「自分の句」は常に他の人々によって詠まれ、解釈される。そして次には「誰か他人の作る句」のための前句となってその付句の世界に奉仕するという形を取ることになります。こうした連句の、共同で作品を享受し、その享受の先に新たな展開を図るという点は、国語の授業での、質疑応答や意見交換を通じての一つの「読み」を提出し、共有するという作業と極めて近いのです。

（「連句を教えるということ」『日本文学』一九九九年三月）

このように連句教育（連句実作）は、「コミュニケーションとしての作文」という観点で注目されてきた。宮脇・高野の実践には、連句を巻く共同作業によって学級運営を滑らかなものにしようとする目的があった。一体感のない教室を再編成する道具として、国語科教材を活用しているのである。

高野光男の報告「教室で、文学する、ということ」（『日本文学』45号　一九九六年三月）では、生徒の巻いた連句作品（注・論文末尾、歌仙一覧）と感想文を紹介している。一巻の捌き手は高野が務めている。

> （生徒の感想文・抜粋）
>
> ㋑今回の授業で初めて連句をやってみてとても勉強になりました。一人で短歌を作ったりするよりも、みんなで作った方が楽しいし、

自分が思いもしなかった表現を周りの人がしたり、最後には一人一人が作った短歌がくっついて一つの物語ができていくというところがおもしろいと思いました。

㋒今回の授業は久々に「おもしろい」と感じられるものでした。自分の気持ちはあふれるほどあるので、それを言葉にあてはめ、かぎられた中で表現することに「うれしさ」「たのしさ」「おもしろさ」そして言葉と気持ちとリズムがぴったりきたときの「きもちよさ」の4つの気持ちを味わうことができました。そして何より、俳万智さんになりきれたのがたのしかった。これからも趣味としてやっていきたいです。

㋓最初は思ったことを「五・七・五」や「七・七」にするのができなかったが、2回目、3回目になると、みんなの作った句をみていると作れるもんだなぁと思いました。ただ恋の句を作るのではなく、季節体言止めなど、いろいろな制約がある中で五七五を作るというのはなかなか難しいけど、そこがおもしろいと思った。詩はあまり制約がないと思うので、自由な発想があまりいらない。しかし連句は限られた制約がけっこうあるので、「自由な発想や意外な発想」が必要になり、それが連句または五七五、七七のだいご味だと思いました。家に帰って、ちょっと作ったり、しゃれなんかもおりまぜたらおもしろかった。

高野らの意図する連句のコミュニケーションツールとしての効果が、感想文㋑などからうかがえよう。生徒の感想文中には指導者の影響がある程度混在していると思われるが、こういった生徒の反応をみると連句指導によって作文教育の主体性を培う可能性というものが感じられる。

従来の古典教科書の俳諧の項では、芭蕉『おくの細道』が長く定番教材でありつづけた。『「おくのほそ道」と古典教育』（堀切実編、学文社、一九九八年）第一章Ⅱ「「おくのほそ道」教育史」を参考に作文教育に関連させた項目を引く。

・「幻のちまた」に表れている作者の気持ちを百字程度でまとめてみよう。
・気に入った章段や句について批評・鑑賞文を書いてみよう。

従来古典教育の場で一般的だったのは、このような「作者の気持ち」を考えさせる―つまり、まず鑑賞ありきという作文指導である。古典文学の場合、作品を鑑賞する作業がメインに据えられ、その副産物として作文課題が課せられるのが当然の流れであった。その結果古典教育は、圧倒的に「読む」指導に偏ることになる。古典文法の解析は「読む」ためにあるのであって、古文作文のためにあるのではない。異言語習得として同じ領域と言えても、「読み・書き・聴く」三つの

能力をバランス良く発展させたい外国語教育とは、この点が大きく異なる。文学低迷期の現在、実用性の低さ――「古典なんて勉強しても役に立たないよ」という生徒の率直な価値判断――から、存在意義を見失いがちな古典教育の根本的あり方が、奇しくも露呈されていると言えよう。つまり、「文学を鑑賞する」作業が決して一般的なあり方でなくなった現状では、「鑑賞する」ことを基盤に据えてきた古典文学指導は勢い困難にならざるを得ないのだ。

ただ、対象が現代語であるにせよ古典語であるにせよ、優れた作品の「鑑賞」なくして、「創作」はありえない。「創作」させる上でまず問題になるのは、生徒たちと韻文との接点の少なさである。[1] 高野の紹介した生徒の感想文は、活字文化に疎いと言われてきた、ここ二十年前後の中・高校生世代が、創作欲求・文章表現欲を少なからず持っていることを証明していた。作文指導の際、「鑑賞」と作文の連携プレーは必要不可欠でありながら、見過ごされることも多い。優れた文章の雛型が頭の中により多く入っていることが、全ての文章法の基本である。

二、作文教育としての連句

起承転結型の論理的作文法が実用文書の王道である。必要とされる文章の形態によって具体的な作文法は異なるだろうが、いずれにせよ学校教育における従来の指導形態（生徒に書かせ、教師が読んで採点する）のマンネリ化は否めない。今までの作文指導は、ややもすると「やりっぱなし」教育になりがちであった。

作文教育の流れから定義を試みるならば、連句は否が応でも「読み手」の存在する「非」論理思考の短詩型作文であろう。一九八〇年代のコピー・俳句ブームの中で連句が注目されたのも、短詩型の手軽さと「非」論理思考というポストモダニズムの流行が背景にあった。一巻全体で卓抜な「流れ」を有する古典連句を「非」論理思考と一括していいかは問題が残るが、教室で扱う場合の連句は、極論すれば「連想ゲーム」であっていいと本論では考えている。[2]

宮脇・高野のとらえた連句は「座」の精神を基盤とするコミュニケーションツールであったが、ここでは作文教育の視座を取り入れ、連句実作を利用した語彙の獲得と発信に焦点を当てたい。

ボキャビルを目的とする学習法には、読書後の語彙カード作成・辞書を引く作業の習慣化などがある。ただこの場で必要となるのは、「難解な語彙」「未知の語彙」の確認・蓄積ではなく、ボキャブラリーの多様な展開である。連句には「式目」と呼ばれる、各句の位置ごとに定められたルール（季語の有無・「月」「花」を必ず読み込む「定座」といった取り決め）がある。前掲・感想文㈧で生徒が、「限られた制約」があるために「自由な発想や意外な発想」が必要、と言うように、前句の解釈と式目の制限を取っ掛かりにして頭の中の辞書を手当たり次第に引かせてみよう、という試みが可能となるだろう。

実作の指導について前述の大修館書店［学習の手引き］①・②では、

三句目で離れる（一句目と三句目の句意がかぶらないよう配慮する）こと、季語・定座の指示を挙げている。新版ではさらに現代語の作例を提示し、オリジナル季題を作らせるよう促して、より実作面に傾くことになった。

座談会「高校生による連句・青胡桃の巻」（『国語科通信　一〇六号』一九九九年）で宮脇は、高校生に季語を詠ませる意義についてこう説明している。

《宮脇》「季題を知るということは、ものの見方を知るということになりますから、季題を知ることで世界が広がるのではないかと思うんです。いま、ものを見るということが少ないですから」

宮脇の言う通り、季節を表現するボキャブラリーは時代と共に減少し、季節感の希薄になった昨今では季語無用論もなくはない。しかし現代に通用しなくなった季語があるのなら、新しい季語を作ればいいのである。

たとえば十年ほど前、ある俳句のシンポジウムでひとりの俳人が、「花粉症」はそろそろ春の季語にすべきだという発言をしていました。それが最近の新しい歳時記では、もう春の季語として採録されていたりします。しかしそうした新しい季語も、あくまで伝統的な季語のバリエーションであり、そこにはやはり本意に当たるものが成立しているはずです。「花粉症」なら、読む者はたぶんだれもが、そこから憂鬱な気分を感じとるでしょう。そうなれば、季語となる条件が満たされているわけです

（仁平勝『俳句をつくろう』講談社現代新書、二〇〇〇年）

仁平の言うように、連衆（クラスメイト）の同意を求められる語彙であればいいのだ。例えば論末「木枯らしの巻」、五句目「ラジオからＭｒムーンライトの曲流れ」（秋・月の定座）のように、感想文⑦「自由な発想や意外な発想」を感じさせられるならなおよいだろう。詠み手の実生活に密着し、詠まれた時々の風俗を強く映し出す点が、連句の大きな特長のひとつである。

意識して「言葉」を選ぶ・言い換える、手持ちの日常言語を引き出すための訓練と言い換えてもいいだろう。詩人・俳人が言葉の選択に極めて敏感であるのは言うまでもないが、たとえば感想文㊐「言葉と気持ちとリズムがぴったりきたときの「きもちよさ」」という生徒の素朴な感動は、高校生ながら文学活動の本質を突いて興味深い。

三、古典作品の鑑賞

高野が示してみせた現代語・現代感覚での実作に、古典が資するものはないだろうか。現代へ還元されてこそ、古典の「鑑賞」は意味を持つはずである。

そこで、芭蕉七部集より『炭俵』（元禄七年一六九四）「梅が香に」の巻（注・論文末尾、歌仙一覧）を鑑賞するとき、生徒の実作の参考になる表現を考えてみる。「梅が香に」の巻は、元禄当時の生活用語が多く、解説すべき知識の量は少なくない。読者の中で、元禄頃の庶民生活の情景が自然と目に浮かぶか否かが、「梅が香に」の巻を鑑賞するときの要である。必要とされるのは知識量ではなく、むしろ体験知であるかもしれない。生活習慣・風俗の上での三百年以上の隔たりは余りにも大きいだろう。事実、注釈書の編まれていない古典連句の句意を明確にするのは、研究者にすら容易でない作業である。いずれにせよ、生徒にとって、未知の語彙は増えれば増えるほど鑑賞の妨げになるため、なかでも擬態語・擬声語という、感覚的にとらえやすい言葉に焦点を絞ってみた。

「梅が香に」中、擬態語的な副詞句には次のようなものがある。

一句目「梅が香にのっと日のでる山路かな」
五句目「宵の内ばらばらとせし月の雲」
十二句目「ひたと言い出すお袋の事」
十七句目「町衆のつらりと酔うて花の陰」

「のっと」日の出るさま、とはどのような朝か、さらにその脇句「雉の鳴き立つ」と合わせると、臭覚と視覚、さらに聴覚が加わることでどのような情景が想定できるか。詩情の持つ豊かなイメージを絵画化させるのもひとつの方法である。安東次男はこれら擬態語について、

『炭俵』には、それまでの選集に見られない、いろんな流行語が採り入れられている。たとえば「てふてふしくも（口数多く）誉る」、「すたすたいふて（息を切らせて）荷ふ」、「うそうそ時（薄暮、薄明）の雨の音」、あるいは「はんなりと（華やかに）染まる」という式の語法であるが、この句の「のつと（ぬっと）日の出る」もその一つだろう。多くが狂言・浄瑠璃・歌舞伎などからはやったらしいことばで、中には『炭俵』が初出かと思われるものもあり、一種の擬態語と見なしてよい副詞・形容詞のたぐいである。そういうものを意識的に採り入れ、あるいは工夫したところにも、新集の狙いの一つはあったのだろう。

（『芭蕉七部集評釈』集英社、一九七三年）

と考察し、それぞれの表現について安東独自の見解を示している。詩人らしい注目の仕方であろう。たとえば近年めっきり身近な芸能となった狂言などは、室町期に生まれた最も早いオノマトペの宝庫として知られている。

「豊富な語彙」とは、蓄積された名詞の数を指すだけではない。持っている語彙を加工する技術も、「いかに表現力があるか」を問う要である。オノマトペの効果を活かした表現は生徒を取り巻く生活の中で意外に豊富にある。宣伝・広告文はもちろん、新聞見出しなど、擬

態語・擬声語の表現力は看過できない。最近でも、身辺に溢れる様々なオノマトペを採取した、田守育啓著『オノマトペ擬音・擬声語をたのしむ』（岩波書店、二〇〇二年）が出版されている。オノマトペが児童文学の中で大きな役割を果たしてきたことは、宮沢賢治の例を挙げるまでもないだろう。〈子供はオノマトペの天才〉と言われるように、対象学年が下がるほど、ことさら思いがけない表現を創造してくれるものである。連句とは、知識量ではなく、〈頭の柔らかさ〉を競うゲームでもあるのだ。「古典」という硬い枠内で語られがちな芭蕉の、思いがけない表現の〈自由度〉を感得させ、実作への動機付けに繋がるよう指導したい。

連句とは純然たる「遊び」の文化であるが、この洗練された日本独自な「遊び」は、日本文化がかつていかに豊潤であったかを示している。未だ触れたことのない自国の文化と出会う場を、生徒たちに提供するのも、教育活動のひとつであろう。

四、創作の指導

授業展開の三つの柱として、「既成の連句の鑑賞」「クラスでの実作」「実作の鑑賞」が立てられる。大修館書店［学習の手引き］は、3人一組で「発句」「脇」「第三」の最も小さい単位を句作するよう指示している。初心者同士で巻くことを考慮した、適切な指示であろう。大人数で行う一斉授業として想定するならば、具体例の鑑賞・ルールの説明の後、教師の指導のもと4、5人のグループで巻かせ、最後に教室全体で各巻の鑑賞会を行う。全グループで同じ季節をモチーフに発句を詠み始めることになるが、グループの個性によってそれぞれ発想の違う展開を見せるほど、授業は面白くなるだろう。

生徒の自主性に任せた完全に自由な作文というものも、生徒にとまどいを与えるものである。発句が出にくいようなら教師側から一句提出してもいいし、教科書に掲載されている俳句を利用して、中から任意の句を選ばせてもいいだろう。前句の解釈はもちろんのこと、前述したように季語・定座は発想のための「切り口」を与えてくれる。また、単純な連想ゲームのようでいて「三句で離れる」技術が初心者にはなかなかに難しい。そこで最低限のルールとして、「前句・前々句に使われているのと同じ言葉は使わないこと」を設定してやるのも一案であろう。これはインターネット上の複数の連句サイトで、実際に設けられているルールである。

韻文である以上、集められた連句を鑑賞する際には、「音読する／させる」という過程を採り入れてみたい。音読しながら一巻の感想などの自然と出てくる雰囲気作りが出来るなら申し分ないだろう。

五、評価の問題と今後の教材展開について

もとより秀句を作らせるのが目的ではないから、自主的に句作に取り組んでいるか、意欲・関心の持ち方による絶対評価が想定される。高野のように感想文を書かせるのもひとつの方法であるだろう。選んだ理由を添えて面白いと思った作品に一票入れさせ、生徒間での人気

投票をしてみてもいい。

評価以前の問題として、指導者側にも生徒の意欲を引き出す工夫が当然求められよう。高野光男の実践は、自身が俳句実作者でかつベテラン教員ということもあり成功を治めた例であるから、氏の方法を一般化して語るわけにはいかないこと、もちろんである。冒頭で既述のように、こうした評価のしにくさ、指導方法の難しさが、韻文教育の難点である。現状を打破する具体的方法の検証には及ばなかったが、本論では韻文鑑賞を作文教育の一環と考え、古典の鑑賞を通じ豊かな詩表現に触れさせることで、生徒の自主的な創作意思を誘発する可能性について論じてみた。今後は、今まで長く等閑視されてきた、中・近世期テキストの教材化論としても機能させたく思っている。先に挙げた狂言とオノマトペの例にもあるように、日本文化が多様に展開し一層の面白みを増してくるのは、まさにこの時期からだ。説話集から浄瑠璃・歌舞伎、三馬や京伝の江戸戯作、馬琴の読本、果ては落語まで、子供を振り向かせる活気ある素材が集中している。

今回、例として挙げた古典連句は、一般の中・高校生が容易に理解し得るものではないだろう。丹念に注釈を読み、何度も読み返すことでしか、その面白味は伝わらない。こうした創作活動を通して自ら主体的に作品を読み返させ、生徒の中にこの「遊び」の文化を鑑賞・創作両面で楽しむというサイクルを構築することで、言葉で表現する楽しさを感得させられたとき、この試みは成功を治めたと言ってよいだろう。

注

(1) 『たのしくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業』「現代短歌の授業」で町田守弘は韻文教育の実際について「国語教育に関する研究発表や実践報告も、やはり散文を扱ったものの方が多い。韻文は扱いにくいという声をよく聞く…日常生活の中で、生徒たちは短歌に接する機会がほとんどない。そこでまず第一に、国語教育の場でさまざまな短歌を紹介し、生徒たちが短歌に出会うように導くことが大切である。彼らが短歌を詠み味わって、自らの感性に響く作品を発見し、短歌に興味・関心を抱くようになればよい。一つの作品の細かい解釈にこだわるよりも、多くの作品を紹介することによって、短歌との出会いを誘発するような扱い方を工夫したいものである」と述べている。

(2) 一九八五・六・一九朝日新聞夕刊「歩き目です」では、連句サークル・「座」の流行について、詩人安東次男の批判「いまの連句ブームは連想ゲームに堕し、本気な遊びになっていない」を紹介している。

引用歌仙一覧

☽＝「月」の定座

❀＝「花」の定座

半歌仙　「木枯らしの巻」　連衆　機械工学科一年

表冬　木枯らしやつなぐ手と手のあたたかさ　朋子《発句》
冬　マフラー巻いて夕暮れの道　周　《脇》
雑　思い出はアルバムにそっと閉じ込めて　俊介《第三》
雑　アクセルふかす湾岸道路　秀之
☽秋　ラジオから「Mrムーンライト」の曲流れ　朋子
秋　フロントガラスに紅葉一枚　裕介
裏秋　振り向けば空一面に鰯雲　龍司
雑　図書館に向かう長い坂道　誠
雑　レポートは明日が締め切り席を取る　和之
雑　ちょっと気になる正面の女　大輔
夏　涼風にそよぐ黒髪香ほのか　英明
雑　目と目があって胸が高まる　宏
☽夏　隅田川花火の向こうに曇る月　道彦
雑　突然の雨に帰る人々　崇文
雑　老店主濡れ手に傘とほくそ笑む　正好
春　初孫に買う雛人形　寛明
❀春　入学式肩に花びらつけながら　裕介
春　春の陽ざしにあくびこらえる　直人

炭俵　「梅が香の巻」　両吟　芭蕉・野坡

表春　梅が香にのっと日の出る山路かな　芭蕉《発句》
春　ところどころに雉子の鳴き立つ　野坡　《脇》
春　家普請を春のてすきにとりついて　野坡《第三》
雑　上のたよりに上がる米の値　芭蕉
☽秋　宵の内はらはらとせし月の雲　芭蕉
秋　藪ごしはなす秋のさびしき　野坡
秋　御頭へ菊もらわるるめいわくさ　野坡
雑　娘を堅う人にあわせぬ　芭蕉
雑　奈良がよい同じ面なる細基手　野坡
夏　今年は雨の降らぬ六月　芭蕉
雑　預けたる味噌とりにやる向河岸　野坡
雑　ひたと言い出すお袋の事　芭蕉
雑　夜宵尼の持病を押えける　野坡
☽秋　こんにゃくばかり残る名月　芭蕉
秋　初雁に乗掛下地敷いて見る　野坡
秋　露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
❀春　町衆のつらりと酔て花の陰　野坡
春　門で押るる壬生の念仏　芭蕉

（＊芭蕉「梅が香に」は初折のみ抜粋、歴史的表現を適宜改めた）

（付記）連句を取り上げた国語科教材について、中嶋隆先生から資料を提供して頂きました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。